

無償資金協力に係る事後評価票

(注)本案件は外務省評価案件であり、外務省による一次評価を踏まえ外部有識者による二次評価を実施していますので、評価項目ごとの二次評価結果を追記しています。
二次評価の概要については、外務省ホームページに掲載されている無償資金協力におけるプロジェクト・レベル事後評価報告書(平成18年度)をご参照下さい。

担当公館名：在ラオス日本国大使館	
国名：ラオス人民民主共和国	案件名：新セタティラート病院建設計画
E／N署名日：1999年4月30日	供与限度額：16.11億円
先方実施機関：保健省	完工日：2000年12月22日
他の関連協力：セタティラート病院改善プロジェクト（技術協力プロジェクト）	
1. 案件の目的	平均余命の低さや乳児死亡率の高さといった、ラオスが抱える保健医療分野の問題解決のために必要な医療制度の再構築を図る上で中心となるセタティラート病院を新築し、同制度再構築及び保健医療分野の改善を支援する。
2. 案件の内容	築40年を過ぎた旧セタティラート病院を新築すると共に、必要な機材を整備する。 施設：セタティラート病院の新設（施設延面積約7,500平方メートル） 機材：基本的な診断、診療などに必要な医療器材等
3. 案件の妥当性	全般的評価：A+（外部有識者による二次評価：A-） 詳細評価：ベーシック・ヒューマン・ニーズへの対応との 我が国援助方針及びラオス政府が掲げる「保健戦略2020」にも合致する。また、同戦略上、セタティラート病院がピラミッド型のラオス医療制度の頂点に位置する病院の一つとして、地域の病院からの紹介患者の受け入れや、全国から集まる医師、看護士、医学生の研修の場としての機能も有しており、裨益効果が発現している。
4. 施設／機材の適切性・効率性	全般的評価：B（外部有識者による二次評価：B） 詳細評価：（1）病院施設の場所の選定としては、旧セタティラート病院に比し新病院は郊外であり若干不便との意見が当初あったとのことであるが、現在では病院前の道路も整備され、また昨年まで実施していた旧病院所在地から新病院までの送迎バスも特段の必要性がなくなり中止するなど、市民のアクセス面では特に問題はないようであった。また、病院の建設サイトは土地が高く、雨期の豪雨の際にも浸水はなく、また電力供給や給水面での問題もないとのことであった。（2）病院内の設備に関しては、新病院の設計が県レベルの病院として位置づけられていた旧病院の規模を踏襲しているため、薬局や検査室、洗濯室などは手狭であったことから、病院側において医師の待合室などはロビー横のスペースを活用し新たに部屋を設置するとともに、緊急治療室の出入り口を新たに1カ所増設している。また、患者カルテの管理がコンピューター化されておらず、過去5年間の診察記録が全て薬局内に紙の形で書棚乃至段ボール詰めされており、これもスペースを狭くする一因となっている。その他、手術室の手洗い所が1カ所しかなく、通常手術に関わった医師などは10分程度手を洗う必要があるため大変混雑したが、独自予算により4カ所に増やしたとの報告があった。また、ラオスの余り衛生的とはいえない環境（砂埃など）を考えると、手術室は現在の1階ではなく2階とすべきであったとの声が聞かれた。

	<p>一方、本件計画で設置した焼却炉は、医療廃棄物の処理に効果的であり、他の病院からの持ち込みもあるとのことであった。</p> <p>(3) ベッド数については、現在ラオスの患者の好みとして、大部屋よりも個室を望む傾向がある由であり、大部屋にしきりを作る形で個室を新たに22室設置している。</p> <p>(4) 整備した機材は、概ね診療に効果を発揮している由であるが、他方スペアパーツについては入手が困難な物品（特殊なハロゲンランプなど）も含まれる状況が看取された。現在の医療水準にあった最新の機材と、多少最新の技術からは遅れても、スペアパーツの確保など現地事情に即した機材のどちらを望むかとの問い合わせに対しては、後者がより効果的であるとの回答であった。他方、供与機材の使用・維持管理方法については、十分な技術移転がなされると共に、各種マニュアルも整備されており、この点についての問題は特にない由である。</p>
5. 効果の発現状況（有効性）	<p>全般的評価：A （外部有識者による二次評価：A -）</p> <p>詳細評価：(1) 年間の外来患者数としては、過去最も多い2003年（88,451人）、次に多い2004年（79,613人）に比し、2005年は53,974人と減少している。基本設計調査書では、開院時には一時的に患者数は減少することが予想されているが、実際には開院後一度増加し、徐々に減少してきている。これは、ビエンチャン市内や周辺の地域病院等の質が向上し、セタティラート病院には比較的重症患者が集中してきているためと思われる。実際に、平均的なベッド占有率を見ると、2003年以降、平均して約75%強であり、他病院では扱えない患者がセタティラート病院に搬送されているものと考えられる。</p> <p>(2) 病院の収入（政府補助金を除く）の観点からは、新病院完工翌年の2001年～2002年が約36億キップ（約360万ドル）なのに対し、2005年～2006年では約86億キップ（約860万ドル）と年々増加傾向にあり、ラオス医療制度の頂点に位置する病院として、健全な病院経営を行っているといえる。これは、同病院が持つ医療制度の再構築を進める上で重要な役割を果たすための前提となるものであり、高く評価出来る。</p>
6. インパクト	<p>全般的評価：A （外部有識者による二次評価：A -）</p> <p>詳細評価：(1) 新セタティラート病院の建設により、各種研修を実施している。具体的には以下の通りであり、実際の実施は大学医学部、地域の看護士養成学校、県などの地域病院などからの要請に基づき実施している由である。</p> <ul style="list-style-type: none"> (イ) 医学部学生（2年生、7年生）に対する臨床研修（2～4週間） (ロ) 看護士養成学校学生に対する研修（3～4週間。年間120～130人がローテーションで研修） (ハ) 医師に対する卒後トレーニング（3ヶ月乃至6ヶ月） (二) 外国からの研究者受け入れ <p>これらの研修などを通じ、セタティラート病院の進んだ技術などが広く全国に広がる契機となっている点は高く評価出来る。</p>

	<p>他方、上記研修生などの受け入れを1年を通じ行っているため、本来の病院スタッフ290人と同研修生などを加え、病院内には常に350人程度の病院関係者がいる状態となっている。このことが、一方では病院を手狭とする一因ともなっているが、他方、当初計画において教育機関としての同病院の役割が期待されていることに鑑みると、病院の設計時にかかる教育機関としての機能や十分な執務スペースを想定すべきであったものと考えられる。</p> <p>(2) また、他病院からの紹介患者も相当数に上り、ラオスにおける高水準の医療サービス提供機関としての機能を名実共に備えているものと評価出来る。</p>
7. 自立発展性・さらなる改善の余地 <small>(改善の余地がある点については以下に記入)</small>	<p>全般的評価：A (外部有識者による二次評価:A)</p> <p>詳細評価：(1) セタティラート病院自身による機材・施設の維持管理体制は十分に取られており、機材管理台帳、定期点検簿なども十分に整備されている。また、衛生管理の面でも、業務の効率化を図り、外部委託をしている。さらに毎週月曜日朝8：15～9：00まで病院長以下各部局関係者が出席し、機材の状況や病院運営についてのミーティングが開かれているなど、病院管理面では十分な自立発展性を兼ね備えているものと思われる。</p> <p>(2) 病院収入の面でも、上記5.(2)のとおり、年々収入が増加しているが、これの背景には病院独自の健康保険制度の導入が大きな効果を発揮している。</p> <p>(3) また、基本設計調査時には、本件計画には含まれないと結論づけられた患者家族の宿泊施設の建設につき、宿泊施設は建設されていないものの、独自に病院横のスペースに家族用の簡易な待合所を建設しており、自助努力の一例として評価出来る。</p> <p>(4) 一方、収入を圧迫する要因として、貧困患者に対する無料治療サービスがあるが、ラオスの経済状況を考えるとき、今後もかかるサービスを継続せざるを得ないものと考える。他方、地域病院の質の向上や病院の収入増などにより、将来的には無料サービスの実施は、それほど大きな収入減には繋がらないのではないかとも考えられる。</p> <p>(5) 近代病院としての同病院の運営上問題と考えられる点としては、患者データの電子データ化がある。現状では、上記4.(2)でも述べたとおり、同データは全て紙で保存されており、再来患者への対応や治療データの蓄積・分析上大きな障害となっている。</p>
(1) 対応方針	
(2) 対応方針理由	
8. 広報効果（ビジュアリティ）	<p>全般的評価：A (外部有識者による二次評価:A -)</p> <p>詳細評価：病院正面に設置された日本国旗を載せた銘板や、ラオスの国旗と共に掲揚されている日本国旗などから、我が国支援であることは常に一般市民の目に触れる形で紹介されており、広く周知されているものと思われる。</p>

9．被援助国による評価 (外交的効果についても、本欄に記述する)	医療分野での支援は、貧困削減の観点から我が国が力を入れてきている分野であり、特に「保健医療訓練施設整備計画」(本年度完工済み)、「郡病院改善計画」(本年8月交換公文署名済み)の無償資金協力やその他技術協力など、本件支援に続く各種支援の実施に加え、当地ドナーコーディネーションでも我が国が保健分野の議長を務めている。これら保健医療分野での我が国の貢献は、一様に高い評価を得ており、特にその中でも本件セタティラート病院は象徴的存在である。
10．提言・教訓	<p>(1) 病院設計</p> <p>上記でも触れたとおり、今回の面談において施設の手狭さが何度か指摘された。一方、基本設計調査書では、過剰な病院スタッフ数の縮減につき提言されているが、上記6.(1)でも述べたとおり、教育機関としての機能拡充に伴う研修生などの増加は、基本設計調査書でかかる機能の拡充を本件計画の大きな効果の一つと位置づけている以上、ある程度想定すべき事項であったものと考える。この点、今後同様の施設の設計においては、将来の病院像を十分に見据えた施設規模とするべきである。</p> <p>(2) 各室の配置等</p> <p>上記4.(2)で病院側から指摘があったとおり、手術室の設置場所や手洗い場、緊急治療室の出入り口など、日本的な基準では想像出来ない問題が発生することを念頭に置くべきである。その上で、実際の設計時には、ラオス側関係者の意見を十分聞き調整を図る努力を行うことが重要である。</p> <p>(3) 機材選定</p> <p>基本設計調査書では、機材の選定にあたり、現地でのスペアパーツの入手可能性や現地レベルにあった機材の選定を行うことにより、病院の自立的発展性を確保する旨随所で述べられているにもかかわらず、実際には上記4.(4)のように問題点が指摘される結果となっている。こういった問題を未然に防ぐためには、事前調査にあたり十分な現地事情の把握とラオス側関係者との意見交換が重要であり、将来に禍根を残さないためには、かかる事前調査に必要な手間と予算を十分かけるべきである。</p>
11．その他	